

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年4月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 花 輪 由 樹

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	(和文)第16回ARAHEアジア地区家政学会 国際大会 (英文) 16th ARAHE INTERNATIONAL BINNIAL CONGRESS	
発 表 題 目	(和文)『児童の世紀』における「ミニ・ミュンヘン」の真髄 (英文) The essence of Mini-München in “The Century of the Child”	
開 催 場 所	フィリピン マニラ マカティ市	
渡 航 期 間	平成 23 年 7 月 24 日 ～ 平成 23 年 7 月 30 日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000 円
	使用した助成金額	150,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	参加登録料 US \$ 250(約20,500円) + 手数料8,000円 = 28,500
		航空料(往復分)62,505円
		宿泊費(6泊分) US \$ 1,018.38 = 86,482円※
		※宿泊費のうち、27,487円は自己負担

成果の概要

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻
博士後期課程 2 回生 花輪 由樹

<報告の概要>

報告者は、京都大学教育研究振興財団の平成 23 年度国際研究集会派遣助成 II 期採択者として、以下に示す国際学会に出席した。この報告書では、国際学会の概要や雰囲気などを報告するほか、今回初めての経験となる国際学会の参加で得られたことについて述べていきたい。

<学会の概要>

学会名称：第 16 回 ARAHE (16th ARAHE INTERNATIONAL BINNIAL CONGRESS)
主催者：ARAHE アジア地区家政学会 (Asian Regional Association for Home Economics)
開催期間：2011 年 7 月 25～29 日
開催場所：フィリピン マニラ近郊 マカティ市 AIM センター
参加国数：10 か国 (日本、韓国、台湾、マレーシア、フィリピン、タイ、インドネシア、シンガポール、オーストラリア、インド)
主な参加者：上記のアジア地区における家政学関係者

<全体のスケジュール>

今回の ARAHE アジア地区家政学会は、第 16 回目を迎えるが、フィリピンでの開催は初めてであった。予定されていた内容が突然変更になることもあったが、基本的には 5 日間にわたり、以下のプログラムで行われた。

7 月 25 日：①ポスター発表 I、②ワークショップ

7 月 26 日：③オープニングセレモニー

7 月 27 日：④スタディーツアー

7 月 28 日：⑤ポスター発表 II、⑥オーラルプレゼンテーション

7 月 29 日：⑦カントリープレゼンテーション、⑧クロージングセレモニー

<報告者の発表>

報告者は、7 月 26 日～29 日に発表内容であるポスターの展示を行い、7 月 28 日の 9:00～9:45 分の間に質疑を受けた。発表の内容は、児童中心主義教育において世界的名著とされる『児童の世紀』が、子どものまちづくり活動の遊び場「ミニ・ミュンヘン」と関わりがあることを踏まえ、その具体的な関係性を探ったことである。

<得られた成果>

ポスター発表について

今回は、国際学会でもあるが、ポスター発表も初めての体験であった。普段慣れている日本語の口頭発表とは違い、英語で分かりやすくインパクトを持って伝えることが必要であると感じていた。そこで、英語に不慣れな人でも、ひと目で見ても、全体の概要が掴めるよう、デザインに配慮した。

ポスター発表の会場には、30枚のA4サイズに縮小したポスターも置いておいたが、帰国の際には、数枚しか残っていなかった。時間のない人や、さらに見たい人に、じっくりと見てもらうことができたのではないかと思う。

さらに今回の学会参加は、自身の研究対象である「ミニ・ミュンヘン」が、アジア地域にも見られるのかどうかを確認するという意図もあったため、名刺やポスターには「Do you know MINI-MUNCHEN?」という呼びかけの用語も入れた。その結果、開催国のフィリピンやタイ、韓国の参加者は、この「ミニ・ミュンヘン」という遊びのシステムを初めて知る人ばかりであることが分かった。つまり、今回はアジア地域で「ミニ・ミュンヘン」の活動の広がり確認できなかったが、このような活動がまちづくりの遊び場として存在していることを紹介することができた点で、意義があったと思われる。

さらに、日本の参加者から、新たな日本の「こどものまち」の情報を教えていただいた。

国際学会に参加したことについて

国際学会で自身の研究を発表することは、私の一つの目標であった。参加を終えて、3点気づいたことがある。

1つ目は、国際学会は開催地域のお国柄が現れるということだ。なぜなら、セレモニーでは終始、楽しいダンスが繰り広げられ、参加者全員がダンスに誘われた。もし日本が開催国となった時、ダンスパーティーが開かれるだろうか？と考えた際、あまり想像できない。やはりこれはお国柄なのだろうと思う。フィリピンという国の日本とは違う陽気さを肌で感じる事ができた。

2つ目は、自身の研究の方向性を再確認できるということだ。研究対象である「ミニ・ミュンヘン」の活動は、日本全国に広がっており、今回はその始まりを探したが、それをなぜ国際学会で発表する必要があるのかということを確認できた。

3つ目は、アジア地域の人と知り合うことができたということだ。インターネットが普及しているとはいっても、面と向かって世界の人々と、自身の研究や分野について討論できる機会は、このような学会の機会がないと経験できないことである。

今回得られた知見をこれからの活動に大きく活かしていけるよう、今後も国際的な視点を持って研究を進めていこうと考えている。